

センリョウ産地で発生するアザミウマ類とその被害

試験研究計画名：日本の伝統花きセンリョウの輸出を見据えた輸送および病害虫対策技術の確立
 地域戦略名：日本の伝統花きセンリョウの輸出を見据えた輸送および病害虫対策技術の確立
 研究代表機関名：茨城県農業総合センター

地域の競争力強化に向けた技術開発のねらい

センリョウでは一部の生産者が試験輸出の取り組みを開始し、販路の拡大を模索していますが、センリョウに発生するアザミウマ類は、発生生態が明確でないため被害実態が把握できず効果的な防除体系を組むことができませんでした。台湾等ではアザミウマ類が検疫対象となるため、発生種や発生時期の把握は輸出の検疫対策に必須です。そこで、高知県センリョウ産地でのアザミウマ類の発生状況を調査し、主要な発生種の生態とその被害を明らかにしました。

開発技術の特性と効果：

圃場で発生する主なアザミウマ類は、ハナアザミウマ、ネギアザミウマおよびチャノキイロアザミウマで、トラップ調査では開花～果実肥大期の6月中下旬～7月上旬に増加した後、7月中下旬から減少し、8月以降はほぼ確認されず、センリョウ株への寄生も8月以降全く認められませんでした（図1）。以上から、11月以降の収穫時にアザミウマ類がセンリョウに混入するリスクは低いと考えられます。なお、暖冬など天候によっては発生が継続する可能性があるため、台湾等への輸出を行う場合は、収穫前に発生をチェックし、発生が認められた場合は収穫直前に薬剤防除を行ってください。

ハナアザミウマを高密度に接種すると、果実に小斑点の障害が認められました（図2）が、主に問題となっているコルク状の障害は認められませんでした。なお、他の2種では被害は全く認められませんでした。圃場では、ハナアザミウマの被害がわずかに見られたのみであることから、アザミウマ類によるセンリョウへの被害は全体的に少ないと考えられます。

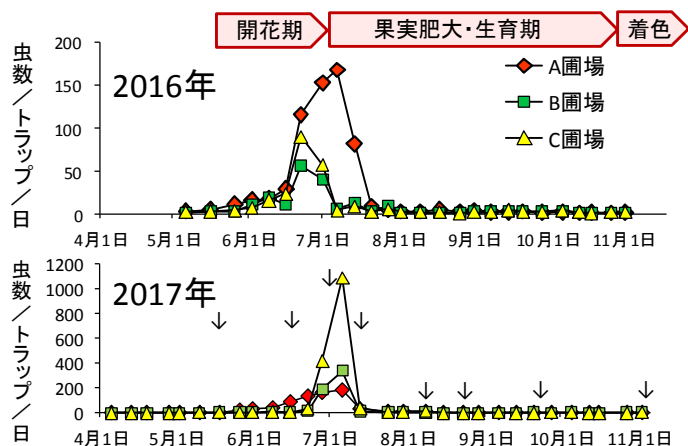


図1 高知県センリョウ圃場でのアザミウマ類の発生推移
 注) 粘着トラップ（青・黄）を設置して、概ね7～10日間隔で交換し、誘殺されたアザミウマ類の個体数を調査した。
 ↓はアザミウマ類対象の殺虫剤散布を示す（2017年のみ）。



図2 ハナアザミウマ高密度接種により発生したセンリョウ果実の小斑点の障害

開発技術の経済性：

開発技術の経済性：アザミウマ類が輸出時の検疫で問題となる可能性が低いこと、またセンリョウを加害する可能性が低いことから、アザミウマ類が多発する6月中旬から7月中旬を除けば、徹底防除の必要性は低いと考えられます。そのため、暖冬など気象条件でアザミウマ類の発生が継続している場合を除き、慣行の8回の薬剤防除を4回以下に減らすことで、アザミウマ類を対象とした慣行の薬剤防除に要する農薬費（約 23,000 円/10a）等の経費を1/2以下に削減できると見込まれます。

表1 センリョウ栽培でのアザミウマ類防除にかかる殺虫剤費用(10aあたり)

	慣行防除	6月～7月重点防除
アザミウマ類対象殺虫剤使用回数	8回	3～4回
殺虫剤費用	約23,000円	約8,500円 ～11,000円

注) 2017年の慣行防除圃場での殺虫剤散布履歴から算出した。

こんな経営、こんな地域におすすめ：

センリョウの生産を行うすべての地域に有効な技術です。とくに台湾等アザミウマ類が検疫対象となっている地域にセンリョウの輸出を考えている経営体に推奨します。

技術導入にあたっての留意点：

- ・地域によって発生するアザミウマの種類やセンリョウに対する加害部位が違う可能性があるため、アザミウマによる被害と思われる症状が発生した場合は普及指導センター等の指導機関に相談して下さい。
- ・暖冬など天候によっては収穫時期までアザミウマ類の発生が継続する可能性があるため、輸出する場合には収穫前にアザミウマ類の発生をチェックし、発生が認められた場合は徹底した薬剤防除を行ってください。

研究担当機関名：高知県農業技術センター

お問い合わせは：高知県農業技術センター研究企画課

電話 088-863-4912 E-mail 160506@ken.pref.kochi.lg.jp

執筆分担（高知県農業技術センター生産環境課昆虫担当 近森ちさこ）